基本的文献であり入門書でもある教典として『天国の礎』がある。現在もそれは再編纂中であり、その一つの巻が「社会・救世自然農法」を中心にして編纂され、一九九三年に刊行されている。そのなかで比嘉に自然農法について解説させている。そこでは、EMの科学性、岡田の教えとEMとの相同性、そして岡田の教えを実践していくうえでEMの不可欠性が述べられている。

（自然界を）蘇生型へ誘導するのがEMの役割です。明主様（岡田茂吉）もすでに、生きた健康な土にするための土壌動物や微生物の働きに対する認識をお持ちになっておられました（『天国の礎—社会・救世自然農法—』四〇〇頁：括弧のなかは筆者が補ったものである）。

また、教団の自然農法に関する研究機関である「自然農法国際研究開発センター」が監修する『エコ・ピュア』という雑誌を刊行している。この雑誌は一九九二年に刊行されたEMについての情報誌であり、内容は宗教色がなく、例えばEMの使用方法やその効果の実例を紹介したりしている。EMの有効性に関しては批判がされており、その批判に対して答えるためであると思われるが、他の研究機関にEMの有効性についての実験を委託し、その結果も報告している（EMの有効性を科学的に立証する報告がなされている）。そして、EMにまつわる関連商品を教団の系列の会社—㈱瑞雲で販売している[20]。

ここで留意すべきことは、比嘉もしくはEMの議論にのるということの含意である。確かに比嘉の議論には科学的に見て逸脱していると言えないわけでもないが、その議論は科学的様式化されている。その比嘉の議論の科学性こそが「世界救世教」にとっては重要性をもっている。上述した他の研究機関に委託してEMの有効性を科学的に調べようとしていることは、EMの科学性が「世界救世教」にとって如何に重要性をもっているのかを如実に表している。すなわち、そうした比嘉もしくはEMの議論にのるということは、自分たちの自然農法が科学的に正当性をもっていることを示すうえで、必要不可欠なことであるということを意味しているのである。

では「MOA」はどうであろうか。「MOA」はEMについて反対ないし拒絶の立場をとっている。すなわち、「MOA」は自分たちの研究機関である「自然農法国際研究開発センター」や「全国MOA自然農法産地支部連合会（略してMOA全自連）」を通して、EMの効果を科学的に分析して、その有効性を疑わしいとし、EMに依存しない、自分たちの自然農法を展開している。「MOA」は自然農法（「MOA自然農法」）に関する独自のガイドライン—「MOA自然農法ガイドライン」を一九八七年に作り、それに基づいて自然農法を展開している[21]。このガイドラインによって、ある資材を用いたい時にはガイドライン運営委員会に申請し審査され認可されたものだけが、その自然農法において使用できるとしている。EMを含む微生物資材についても、審査をうけて認可をうければ、使用は可能になる。他の微生物資材については認可されうることが述べられているが、しかしEMについては極めて否定的である。それはEM自体あるいはその効果そのものに対して疑念を抱いているからであろう。少し長くなるけれども、EMについての質疑応答には「MOA」のEMへの批判が如実に現れているので、引用しておく。

Q．EMの効果を立証できるような公的な実験データは出ているのでしょうか。

A．～略～沖縄県農業試験場が昭和60～62年にかけて有効微生物群施用による各種試験を実施したところ、①サトウキビの品質及び増収試験では「効果は判然としなかった」～略～という結果が出ました。また、㈶環境科学総合研究所の室内実験でも、～略～とりたてて「効果は認められない」という結論が出ています。

～略～比嘉氏は、EMを農業をはじめ生ゴミ対策など環境問題や社会生活全般にわたって有効であるとコメントしています。～略～一つの

20）大きな支部教会には㈱瑞雲の販売店がそのなかにある。

21）教団関係者が語っていたことであるが、国家レベルでの「有機農産物等にかかる青果物等特別表示ガイドライン（一九九三年四月一日施行）」のベースに「MOA自然農法ガイドライン」が使用されたそうである。